





1907(明治40)年  
東京府勸業博覧会出品し  
た方『わたつみのいご』  
の宮が等々に甘じ、失  
意に沈む青木を『父愈』  
の報が追い打ちした。  
東京から急ぐ留米に戻  
った青木だが、父愈の死  
に目には余念なかった。残  
されたのは借金と母と姉と  
3人の弟妹。長男の青木の  
肩にそれらがしかる。  
芸術の退路から離れて美  
術教師などしながら暮ら  
す手だてもあったのだらう  
が、定職に就いた形跡はな  
い。生来の負けん気の強き

もしれない。  
と悪くても仕方ないの  
な長期を考えれば、普通  
たれた青木の惨めで仕絶  
えという。「天才」どう  
な巨匠。こつ唱える人も  
面「あれは朝日じゃない。  
が波頭を照らす静かな画  
本平織の近くで輝く太陽  
に教えられたからだ。」  
いふ説を、佐賀市の愛好家  
と見たと朝日を描いたのだと  
黄城会蔵)はこの海岸か

柔らかな朝日が注ぐ海は  
どまでも静かで、さび疲  
がきらきと揺らめいて、  
逃れるように、青木は迷走  
た。3月中旬のある朝、私  
は佐賀県唐津市の西の浜に  
立った。青木繁(1882  
『1911』の絶筆朝日』  
酒色に散財する。あまりの  
無軌道さに怒った家族と  
黄城会蔵)は、この海岸か

## 朝日 最後の輝き

# 貧しさと病氣 絶望の淵で

没後100年 青木繁  
展 青木繁 芸術  
— 5月15日まで、福岡県  
久留米市野中町の石橋橋美  
術館—0942(39)1131。青  
木繁の油彩画や素描、手  
紙など291点を展示。入  
場料一 般1000円ほか。



〒814-0006  
092(711)6243  
e-mail  
bunKaKa@nishinippoon.co.jp



「朝日」(絶筆、小城高校同窓会黄城会)

## 天を仰いで

没後100年・青木繁

□□□下

と頷でいる。  
そしてこのころから、青  
木は精進に侵されていく可  
能性が高い。貧しさと病。  
メソッドの世界を自在に飛  
躍的な筆づかいも影響を  
び回った翼に破綻した生活  
が絡みつき、やがて青木は  
地に沈んでいった。石橋  
美術館(福岡県久留米市)  
の志業員植野健造さんには  
『秋声』を出品する。  
『秋声』は、生気がほと  
病を治して上京したいとい  
はしる全盛期とは程遠い。  
木側に立つ和装の女性像  
は静かで、寂しい。着衣  
の縲の繰り返したように、

と頷でいる。  
そしてこのころから、青  
木は精進に侵されていく可  
能性が高い。貧しさと病。  
メソッドの世界を自在に飛  
躍的な筆づかいも影響を  
び回った翼に破綻した生活  
が絡みつき、やがて青木は  
地に沈んでいった。石橋  
美術館(福岡県久留米市)  
の志業員植野健造さんには  
『秋声』を出品する。  
『秋声』は、生気がほと  
病を治して上京したいとい  
はしる全盛期とは程遠い。  
木側に立つ和装の女性像  
は静かで、寂しい。着衣  
の縲の繰り返したように、  
活の縲の繰り返したように  
返り咲きは果たされなかつ  
た。10年7月、青木は東京の  
は、太陽が別の所に描かれ  
ていたように見えました。  
青木は最後まで太陽の位置  
を悩みながら、全精力を注  
ぎ込んで描いたのではない  
でしょうか。  
朝日が夕日に見えてしま  
うのは、短くはかない青  
木の生涯を見る者が心を寄  
せるから、なかもしれな  
い。しかし青木は、男尊女  
大が、その年の正月に松浦  
病院から東京美術学校(現  
在の東京芸術大学)時代の  
恩師黒田清輝に年賀状を送  
りながら「天才」青木繁の最後  
の病状もその後の経過は良  
好で昨年12月から快癒は回  
かっています。』何げない  
(藤原眞喜)